4.と畜場でみられた牛白血病の病型別比較検討

○岡地（オカチ）　潔（キヨシ）　（豊橋市食肉衛生検査所）
下司　高弘（　　〃　　）
松田　克也（　　〃　　）
合川　敏彦（　　〃　　）
山内　俊平（　　〃　　）
細井　美博（　　〃　　）

【はじめに】

近年、牛白血病の全国的な急増が報告されており、当検査所の所管すると畜場でも特に平成 20 年度以降増加傾向にある。牛白血病は、牛白血病ウイルス（BLV）が原因となる成牛型と、原因不明である子牛型、胸腺型及び皮膚型に分類される。このうち家畜伝染病として問題となるのは成牛型であり、牛白血病の正確な病型診断は防疫上重要であると考えられる。今回我々は、牛白血病症例について免疫組織化学及び BLV 抗体試験を行って病型診断を試み、比較検討した。

【材料および方法】

肉眼検査、血液検査(塗抹標本鏡検及び白血球数測定)と病理組織学的検査によって牛白血病と診断した 8 症例について、牛白血病抗体アッセイキット「日生研」を用いた受身赤血球凝集反応法による BLV 抗体試験を行った。情報に従いパラフィン切片を作製し、B 細胞マーカーとして CD79・(DAKO)、T 細胞マーカーとして CD3 抗体（DAKO)を用いた免疫組織化学的検索を行い、病型診断を行った。

【結果および考察】

8 症例のうち、５症例については、BLV 抗体陽性と CD79・陽性腫瘍細胞を確認し、成牛型と診断した。２症例は、肉眼的、組織学的に胸腺の腫瘍性腫大を認め、BLV 抗体陰性と CD3 陽性腫瘍細胞を確認し胸腺型と診断した。また 1 症例(14 ヶ月齢)は BLV 抗体陰性、CD3 陽性腫瘍細胞を確認し子牛型と診断した。

成牛型と診断した症例では多彩な病態を示した。特に体表に多数の腫瘤を認めた症例は、自壊は認めず体表のリンパ節が腫瘍化したものと考えられ、皮膚型を疑わせる所見ではなかったものの特異なものであった。また、13 ヶ月齢と若齢であるにも関らず BLV 抗体陽性と B 細胞性リンパ腫であることを確認し、成牛型と診断した症例もあった。子牛型と診断した症例は、14 ヶ月齢とやや高齢であるが、BLV 感染が認められず、T 細胞性リンパ腫であると確認されたことから、子牛型であると考えられた。

牛白血病は多彩な病態を示し、月齢や肉眼所見のみでは病型の確定診断を行うことは困難な場合がある。特に成牛型と子牛型はいずれも多中心型であり、月齢のみでは診断できず注意が必要である。ウイルス感染の確認と免疫組織化学による細胞タイプの鑑別を行い、牛白血病の病型診断を行うことが重要であると考えられた。